

創造する側に立つ演劇ワークショップの実施

LOOP¹⁰

活動の目的

私たちの活動目的は、演劇をはじめとする舞台芸術の世界に参加してもらい、また体験・創造することを通じて、地域の表現者人口・鑑賞者人口を増やし、地域自らの創造性と弾力性を高めて活性化を図ることであり、今年度は子ども向け事業や若い世代に積極的に芸術の第一線に触れてもらう取り組みを重視した。

活動の内容及び経過

今年度の活動内容は、オープニング・ワークショップ(6/3・4)を皮切りとした、U18創作ワークショップ発表会「習作版・ロミジュリ」(6/10～18 講師三浦宏之)、創作ワークショップ発表会「夏の夜の夢」(7/22～30 講師大久保美智子)、みんなで作る音楽影絵ワークショップ「アリス・イン・シャドウ」(9/29～10/1 講師99roll)の4本のワークショップ、および公募公演「八月、鳩は還るか」(10/28・29)、プロ公演「班女」(11/18・19)、てんやわんやの年越しミュージカル!「108」(12/30・31)の3本の演劇公演で、三島由紀夫リーディングなどの関連イベントを含め、実に半年以上をかけて大小さまざまな事業を実施した。とくに、習作版ロミジュリではダンス初体験の若者が発表に挑んだり、音楽影絵ワークショップでは2歳の子から参加したり、班女と108では、未就学児を無料にする親子観劇の公開ゲネプロを設けるなど、多くの子どもに参加いただいた。なお、オープニング以外のワークショップでは、すべて最終日に公演を行い、ワークショップの成果を発表できる機会を設けた。また、「八月、鳩は還るか」では、演劇経験がほとんどない県民も交えて京都の劇団の問題作を岡山版として再構築し、多くの観客に衝撃を与えることができた。「班女」は岡山シティミュージアムの一室を借り、駅1分という立地にかかわらず日常と大きく断絶した劇空間を提供することができ、最後の「108」は大晦日を演劇で彩るというテーマに多くの人が賛同し、煩惱をテーマとしたパフォーマンスを通して、出演者・観客全員で演劇で年を越すという体験を共有した。

活動の成果・効果

青年団の平田オリザさんは、著書「芸術立国論」の中で、湯水を浴びせるように子どもの頃から芸術に触れさせなければならぬと著しているが、今年度は昨年度を大きく上回る形で、子どもはもちろんのこと、小さい子どもがいることでなかなか芸術鑑賞に赴けない若いお母さんお父さん方に、足を運んでもらえたと考えており、アンケート等でも大変多くのうれしい声をいただいた。そして、昨年度と



同様、今年度も参加者・鑑賞者を含めて1,000人以上の方に参加してもらえたので、そのうちの何割、いや何%であっても、各々の次のアクションにつながるきっかけとなったのではないかと、ひいては私たちが理念としている地域の創造性・多彩性・弾力性の向上や活性化に少しでもつながったのではないかと感じている。

今後の課題と問題点

課題となったのは、長期にわたり多くの事業を実施したことだった。事業数に関しては、できうるかぎり多くの機会を提供したいという思いがあったからに他ならないのだが、メンバーはそれぞれの仕事をこなしながら空いた時間を使って事業を行っており、準備段階を含む一年をかけ、様々なワークショップ、公演を計画し、実施することはたいへん厳しい戦いだった。さらに、事業の質を高めるため、第一線で活躍する講師を招聘したが、どうしても(岡山県だけでなく他の地公都市での課題にもなるのだろう)収支の面から、受講料の金額の設定をせざるを得ず、そのためになかなか参加者が集まらない状況もあり、事業の展開の仕方と集客方法・収支の基本的考え方のベースを再検討し再構築する必要性を感じたのも事実である。

- 代表者：藤原康典 ●所在地：岡山市中区藤原
- TEL：086-271-1745、090-7373-3005
- E-MAIL：shibaiokayama@gmail.com
- 設立年：2015年 ●メンバー数：10名